
暇人の暇つぶし

暇人弐号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇人の暇つぶし

【Nコード】

N7499X

【作者名】

暇人式号

【あらすじ】

神の部下のミスで殺され転生なんてありきたりな事になった主人公がネギま！の世界で暴れまわる(?)話

プロローグ（前書き）

初投稿です

あまり期待せずにご覧下さい

プロローグ

「どこだ…ここ…」

目が覚めたと思ったら何も無い真っ白な空間なんだが……

「おお、やっと起きよったか」

……………誰だ？

「ふむ、まあしが無い神とでも言っておこうかの」

頭でも打ったのか？

「失礼な！わしゃマジで神じゃ！」

……………そうか…で、その神様（？）が何の用だ？

「まあ、とりあえず二つ目の用はお前さんへの謝罪じゃな」

謝罪……？何の……

「気付いとらんのか？なら説明しよう……」

“お主は死んだのじゃ”」

……やっぱりか

「なんじゃ、気づいておったのか」

まあ予想くらいならな……神が居てんだ夢か死んだかの二択だろう

「まあ、分かったのなら話は早いの……ぶつちやけるとお主が死んだのは……」

あなたの部下のミス、とかだろ？

「お主……無駄に鋭いのう……そうじゃその通りじゃ」

ここまでくりや誰でもわかるぞ

「そんなことは無いと思うんじゃが……」

でだ、俺の扱いはどうなるんだ？行くのは天国か？地獄か？ はたまた“転生”か？

「本当に鋭いのう」

それくらいだろ、俺に与えられる選択肢は…で、その反応からして俺は“転生”か？

「その話が二つ目の用じゃったんじやがの、話が早くて助かるわい」

そりゃよかった

「まあそれは置いてじゃな」

置いとくのか…

「お主ほど鋭ければもうわかつとるかもしれんが…」

願いをいくつか聞いてくれる、とかか？

「鋭すぎんか？」

……気のせいだろ

「まあよい、とりあえず聞ける願いは三つまでじゃ
ポル○ガみたいだな

「聞く数減らすぞ？」

すまんすまん
願いは三つまでだったな？

「そうじゃ」

じゃあ一つ目………の前に俺はどの世界に行かされるんだ？

「ああ……確か《魔法先生ネギま！》じゃったかな？」

……あれか、確か正義（笑）の魔法使いがウヨウヨいる世界だった
か？

「まあ、間違っちゃおらんが……」

あの世界なら戦える能力が必要だな…

とりあえず一つ目だ

鋼の錬金術師に出てくる能力を全部使えるようにしてくれ

「全部…とはホムンクルスの体や能力もかの？」

ああその通りだ、ついでに賢者の石の使用できる回数も無制限でな

「その程度なら問題はないわい」

なら、二つ目だが…

とある魔術の禁書目録の超能力だな

「ふむ、了解した」

で、三つ目は…

他の転生者を絶対に送り込まないでくれ

「フォツ？そんなもんでいいのの？」

ああ、もし他の転生者が幻想殺しとかでも持ってたら勝ち目なんて無いからな…

「確かにそうじゃのう」

これで俺からの願いは三ついいんだろ？これで？

「ふむ、オマケじゃ気と魔力、身体能力もMAXにしておいてやる
う」

それは助かる

「二度目の生をすっかり楽しんで来るのじゃぞ」

りよーかいした

そこで俺の意識は暗闇に落ちていった

プロローグ（後書き）

感想などはなるべくお手柔らかに…

第1話(前書き)

かなり短いですが一話目どうぞ

第1話

……………ここは？

「知らない天井…てか空だな」

そついや転生したんだっけか

「とりあえず能力がどれくらい使えるかの確認でもするか…」

まずは強欲グリードの炭素硬化

次に傲慢プライドの能力…使い勝手は良さそうだな

怠惰スロウの能力炭素硬化と組み合わせると銃弾みたいになりそうだな…

憤怒ラースの能力…目どうしよう？

嫉妬エンビイ、色欲ラストは別にいいや

暴食グラトニーは…怖いから今度でいいや

「色々と試してみたが…まさかりザさんの狙撃技術もあるとはな…
…」

てか今はどの時代だ？
大戦期は勘弁してくれよ…

「まず街でも探すか…」

見たところ日本っぽいからな…

寺とかあったし

「寺がヤケに沢山あるし…京都か？」

京都なら神鳴流…だっけか？そんな奴らがいたな

「適当に売れそうな物でも錬成して売りさばくか」

貴金属でも錬成して…と

1番近い街まで空間転移テレポルトで行きますか

~~~~~移動中~~~~~

「到着つと……さて、質屋はどこかな？」

あれかな？

~~~~~換金中~~~~~

「とりあえず新聞と地図でも買っか……」

さてさて今は何年かな？

「1990年か……」

することも無いしな……

五年ほどしたら麻帆良に行くかな？

「そのためにはまず能力を使いこなさないとな」

山に籠もって修行でもすっか…

第1話（後書き）

見切り発車にも程があったと思うが…

後悔も反省もしちゃいないさ!!

かなりグダグダになっていたと思いますが、感想お待ちしております

第2話（前書き）

テストなど色々あって遅くなってしまいました。

短いですがご覧下さい

第2話

さてさて…あれから数年たったワケだが…

「じじいじやい」

うん、俺迷ったよ……

麻帆良行こうとして完全に迷ったよ……

ん？俺がこの数年何してたかって？

そりゃ弟子とったり、弟子とったり、弟子とった（ryだな（笑）

「まあ、色々あったねえ」

と、そんな感じで数年過ごしていざ麻帆良へ！！…って思ったんだが……

「まさか迷うとはね……近くまでは来てっと思っただがな」

さっき結界っぱいの抜けたしね（笑）

多分あれが学園の結界だろ

「その侵入者！」

侵入者ねえ……麻帆良も物騒だな（笑）

「止まれ、止まらねば…斬る!!」

……警備してる人も物騒じゃん

声的には女の子んだけどこんなに物騒な女の子なんて原作に……

「いる…ねえ……」

具体的には人と鳥族のハーフの護衛さんですな（笑）

あの子に目を着けられるとは……ツイてない奴も居たもんだ（笑）

「警告はしたぞ、止まらぬならば……」

あれ？殺気がこっちに？

「まさか俺ツスか？」

「お前以外に…誰がいる!!」

うお！！マズいって！！いくらなんでも真剣はマズいって！！ほぼ
不老不死だから問題ないけど…

「待て待て待て！！別に変な理由で来たわけじゃないんだよ」

「ならばどんな理由があつて…！！」

「教師だよ、詳しく説明するならまほーせんせー（笑）だよ」

まあ、正義（笑）とは違うんだけどね

「とりあえずこの学園長のところに連れてってくんない？」

「…わかりました」

~~~~~移動中~~~~~

「着きましたここが学園長室です」

なんで学園長室が女子中等部の校舎に？」

「さあ？それは私にも…」

「あれ？声に出してた？」

「ハッキリと出てましたよ」

「そっか、じゃあここまで案内ありがとうね」

「いえ、じゃあ私はこれで」

…うん、じゃあね烏族のお嬢ちゃん

## 第2話（後書き）

見切り発車すぎて本当にお先真っ暗です…

主人公の名前すらハッキリと決まってい…候補はいくつかあるんだけどねえ

### 第3話（前書き）

いつものように短いですが…とりあえず見てあげてください

### 第3話

そついやアポ無し訪問だけど大丈夫か？

「まあ気にしても仕方ないか」

コンコン

「失礼しまーす」

ノックはするが返事は聞かない、これが俺のやり方さ！！

「とりあえず仕事くれ」

「…唐突じゃのう」

いきなり唐突な話をする、これが俺の（ry

「とにかく職と戸籍くれ」

「なんか増えとらんか！？」

思い出したことをいきなり会話に入れる、これが（ry



「仕方ないじゃん無い物は無いんだよ（笑）」

「むう、とりあえず事情はよくわからんが自己紹介でもしてくれんかの？」

おおうスツカリわすれてたよ

てか、名前どーすっかな…テキストでいつか

「八代 塔夜ツス！！生年月日はわからん！！出身地もしらん！！希望する職は警備員とか！！」

「名前しかわからなかったのじゃが…」

気付かれた！？

だがただではやられんぞ！！

「気のせいツスよ気のせい（笑）」

「まあ、ええか…お主の希望は警備員じゃったな」

「別に清掃員とか用務員でもいいツス」

基本なんでも出来っからな

「ついでに……夜の警備にも参加しましょうか？」

「……やはりお主も関係者じゃったか」

「あ、バレてました？」

まあ、わかりやすいようにしてたんだけどね（笑）

「夜の警備をやらしてもらうにしてもお主の実力が全くわからんからのう」

実力……ねえ……

「少なくともアンタより強いと思うぜ？」

「フオツ！？お主なかなか自信家じゃのう」

やっぱ信じちゃくれねーか……

「じゃあ、アンタの次に強い奴でもいい……俺の実力見してやんよ」

「ふむ…なら、また後で…0時くらいに来てくれんか」

「りょーかいッスその間に麻帆良見て回っていいすか」

原作キャラも見てみたいしな

「そのくらいなら別にいいぞい」

「ありがとッスじゃあ俺はこれで」

早速原作キャラ探しの旅へと出発!!

### 第3話（後書き）

感想、評価などお待ちしています

## 第4話（前書き）

またも短いです

誰か俺に文才を！

## 第4話

さてはて、うるつくとは言ったものの別にすること無いんだよ（笑）

「どっかに知ってるキャラいねーかな」

まあ、こんなに都合よく見つかるわきゃねーな

とは言えどこに居てるか判明してるキャラも居てるんだが…

「この時間なら屋上か家でサボってるかだよな…」

え？誰のことかって？そりゃあ……

「幼JY「誰が幼女か!!」……………」

マジで屋上だったよ…

「で、何故幼女がこんなところに？初等部はまだ授業中だろ」

「だーから！誰が幼女なんだ！」

「アンタだろ」

「私は幼女では無い！しかも初等部ですらないわ！！」

ヤベェいじむの楽しい（笑）

「そーかそーかじゃあ迷子かな？お兄さんが連れてってやるーか？」

「ま・い・ごでもなーい！！」

「別に見栄を張らなくてもいいんだよ（笑）」

「張ってなーい！！まず（笑）って何だ（笑）って！！」

楽しいけどそろそろやめてやるか（笑）

「まあまあ、冗談じゃないか幼女よ」

「……というかお前は誰なんだ…ここまで疲れたのも久々だぞ…」

「べっつに…ただの一般人ツスよ……闇の福音殿？」

「ただの一般人がその名を知っているワケが無いだろう…目的はなんだ？私を倒しにきたか？」

あらら、やっぱりその解釈しちゃいますか…

心外だなああんな正義と一緒クズにされるなんて

「いんや、俺はあんな奴らの仲間になつた覚えは無い」

「なら…何なんだ？」

うーん…どう答えりゃいいだろ？

『アンタと同じ悪』

てのも違うし…

そうだ！アレで行こう！！

「通りすがりの……幼女の味方さ！！」

「だから！誰が！！少女だ！！！！」



## 第4話（後書き）

いつも通り感想や評価お待ちしております

そっぴや幼女の名前出してねえ…

## 第5話（前書き）

相変わらずの大したことのない質ですが…

## 第5話

さて、散々幼女を弄りまくったがそろそろこっちの目的でも話そうか

「…ここまで弄り倒しといて言うのもなんですが少しこっちらの話を聞いて頂けないでしょうか」

「（いきなり雰囲気が変わったな…）ほう、話が…聞くだけ聞いてやる」

「ありがとうございます」

正直、この交渉が成功するか失敗するかで俺の命運…が関わってくるからな…

「とりあえずこっちらの話は、貴女が所持している魔法球…別荘を貸して欲しいのです」

「待て…なぜ貴様が別荘のことを知っている!？」

「こっちにも色々あるんですよ…」

よもや転生者ですなんて言えるワケがない…いくら自身が吸血鬼だからって信じちゃくれやしないだろっしな

「まあいいが、その内ちゃんと理由を聞かせてもらおうかな？しかし、まさかタダで貸してくれ…なんて言わんだろっな？」

「勿論しつかり対価は用意してますから安心して下さい」

「理由のほうは無視か…」

「対価があると言いましても、ここではちょっと…」

「結局全部無視か!？」

とりあえず要件を伝えないとムダに長引きそうだったしな…

「安心して下さい、しつかり聞いてましたから」

「そ、そうか…ならいいだろう」

( いいのかよ… )

「理由…でしたよね」

「ああ、まさか言えませんなどとほざいたりせんだろうな」

「ここで話してもいいんだけどな…学園長が覗いてるかもだしな…」

「言えないことは無いのですが…」

「……ではマズい……と？」

遠見の魔法で覗かれてるか、盗聴器なりで盗み聞きされてるかわからんがとりあえず首肯して答えておく

「ふむ…ならば私の別荘でしっかりと聞かせて貰おうか」

こうして、とりあえず最初の交渉は終了した……

堅っ苦しい喋り方って疲れるな……

## 第5話（後書き）

これからは……いえ、これからも、ちまちまとした更新になると思  
いますので辛抱強く待って頂けるとありがたいです…

## 第6話（前書き）

随分と遅くなってしまいました…

いつもよりは長くなっていますが、相変わらず駄文です

見て頂ければありがたいです

## 第6話

さて…

あれからかなり時間が経ってしまったが…ん？

俺は何を言っただ？ 幼女との「誰が幼女だ!!」…エヴァンジェリンとの交渉からはそこまで経ってないはずだが？

これは…アレか、噂に聞く電波ってやつか

「ところで…さっきはなんで急に叫びだしたんだ？ 端から見ると痛い子だぞ」

「ふむ…何故だろうな誰かに幼女呼ばわりされた気がしたんだが」

「気のせいだろ……多分」

「ん、そうか？ ならいいんだが…」

ちなみに今はエヴァンジェリンの家に向かっている最中だ……ちゃん  
と授業が終わるまでは待ったぞ？

「で、あなたの家はどこにあるんだ？ 寮じゃないんだろ」

「もうすぐ着く、黙ってついて来い」



「別に話すくらいはいいだろ……」

「話なら後でタップリ聞いてやるから黙れ」

「……怒ってる？」

「いや、ただ少しムカムカしてな……」

さつき俺が幼女呼ばわりしたことが最大の原因なんだろうがな……

「ん？（ピクッ）」

「……どうしたんだ？」

「また幼女呼ばわりされた気が……」

「半分事実みたいなもんだろ、とりあえず早く案内しろや」

「事実って言うな！！幻術さえ使えばどうとでもなる……！！」

「ほぼ認めてるようなもんじゃねーか……」

「クッ……まあいい、着いたぞ……！！」

やっと着いたみたいだな……一応原作でも見たが中々いいところに住んでんだな

「どうした、入らんのか？」

「お邪魔させてもらっよ」

おお、マジでぬいぐるみで一杯だ…

「そっぴゃこれって自分で作ってんのか？」

「大体そうだが、どうかしたのか？」

「いや、ただ単にスゲーなって思ったただだよ。それより」

「そ、そうか…そんなにスゴいか」

「ああ、スゴいとおもっぜ？やっぱあれか？15年も中学生やって  
つと暇なもんなのか」

「当たり前だろう！何が楽しくてあんなノー天気なやつらと…そ  
れもこれも全部ヤツのせいだ！！」

「ヤツってーと…『サウザントマスター』か？」

「貴様そんなことまで知っていると…何者だ？」

「とりあえずこの話は別荘入ってからでいいか？」

「フン、まあいいだろうその辺に座って待っておけ」

「わかった、てかお前は何しに行くんだ？」

「別荘を使うなら探して来ねばならんだろう…まったく、面倒な」

「うん、なんかすみません」

まあ流石にすぐ見つかるだろ…あ、そういえば

「エヴァンジェリンさんや、あんたのパートナーのドールってどこに  
にいてんだ？」

「そんなことまで知ってるか…本当にお前は何者なんだ？」

「何度も言ってるだろう？その話は別荘でって」

「なら待っている、すぐにでも探し出して来てやろう…！」

「走ったら駆けちまうぞー…って、遅かったか…」

ビターンって転んだ…あれ、そっぴやチャチャゼロは一体どこに？

「ココダ、ココ」

「ん？どこだ…声だけは聞こえるんだが？」

…なんか、ぬいぐるみの山から顔だけ見えてるんだが…  
なんだあれ？生首か？

「ドーデモイーカラ、早クダセヨ」

「りょーかいした」

とりあえず引き抜いて服を整えてやる

「オツ、気がキクジャーナカ」

「ついでに酒でもどーだ？」

「ケケケ、話ガワカッテルナ」

チャチャゼロ用？の小さいコップに酒を注いでやる

「安物ジャーネーダローナ？」

「疑う前に飲んだらどうだ？お前ならわかるんだろ」

「マ、ソーダナ……ウメーナコレ」

まあ、この辺で一番高かったの買ったからな…美味くなけりゃ詐欺  
だろ

「ハア…ハア…見つけて来たぞ……つて、2人して何をしてる!？」

「何って」

「ソリヤ」

「酒盛りだがノダロ」

「そんなもん見ればわかる!!ええい、私にも寄越せ!!」

「ハイハイ」

全く…幼j「(ピクツ)…エヴァンジェリンはワガママだなあ

てか、結構早かったな…そんなに気になるか?

「とりあえず別荘に入らねーか?話ながらも酒は飲めるしな」

「そうだな、よしついて来い」

「ケケケ、オレモ連レテケヨマダ飲ミタンネーダ」

「フン、知らんわお前はその辺りで転がっておけ!!」

「まあまあ、そんなこと言ってるなよ」

そう言うてから机に座ってるチャチャゼロを頭に乘せてあげる

「オーイイ眺メダ、ご主人ト八大違イダナ」

「どーゆー意味だそれは!!」

「ソノママノ意味ダゼ」

「なにー!! チャチャゼロそこから降りてこいー!!」

「ヤダネ、意外ト居心地イーンダ」

「それは褒め言葉なのか?」

「ソージャーネーカ?」

「まあ、いいやさつさと別荘に入ろうぜ?」

「む、そうだなお前の話もしっかり聞かせて貰うぞ」

「ナンノ話ダ? 俺ニモ聞カセロヨ」

「ハイハイ、わかってますよ」

さて、一体何か話せばいいのやら...

第6話（後書き）

もしよければ感想などお願いします



## 第7話（前書き）

お待たせしました。

いつもど通りの駄文をご覧ください

## 第7話

前回のあらすじ

チャチャゼロと出会った

「それだけなのか!？」

「どうしたんだエヴァンジェリン、急に叫んだりして?」

「ソーダゼ御主人イヨイヨポケチマツタカ」

「ボケてなどない!！」

ん?今俺たちが何してるかって?

それは……

「オイ、旦那ツイデヤルヨ」

「おう、わりーな」

「私を無視して勝手に続けるな!！」

別荘内で酒盛り中だ

ところで…俺の話はいいのか？面倒くさいから別にいいけどさ

「オイ、酒八モウネーノカ」

「流石に酒盛りになると思ってなかったからな、あまり沢山持ってきてないんだよ」

「そうか…なら、別荘に置いてある酒でも取ってくる」

「頼ンダゼ」

「従者に使われる主人って…どうよ」

「言っな…むなしくなるから」

「ケケケケケツケケケケ」

「それ以上笑うな、エヴァンジェリンがキレるぞ」

「……………酒取ってくる」

あら、拗ねちゃった

それでも面倒だからフォローはしないけどな

そんなことする位ならチャチャゼロと遊ぶさ

「さて、チャチャゼロよ」

「ドーシタ旦那」

「エヴァンジェリンが帰ってくる前に……もう一杯やるか？」

そう言っ  
て懐から酒を取り出す

ん？なんでさつき出さなかったかって？

そりゃ、帰ってきたエヴァを弄るためさ

「ケケケ、旦那モ中々アケドイナ」

「そりゃどーも」

数分後…

エヴァが帰ってきた

物凄く息切らしてるだが…そこまで急がなくても

「ハア……ハア……取って……来た……ぞ」

「おう、お疲れ様」

「思ッタヨリ遅カッタナ」

「……………」

「ん？どーしたそんなに小刻みに震えて…風邪か？」

「モシク八何カノ発作カ」

「風邪でも発作でもない！！何故お前たちは酒を飲んでるんだ！！」

「そりゃ、あつたからだろ」

「旦那ノ言ウトオリダゼ」

「なら何故さつき出さなかつたんだ！！」

「ど忘れしてたから仕方ないだろ！！」

「逆ギレされた！？」

「ケケケ、旦那ガ理不尽スギルゼ」

「それは自分でも思ったよ」

やっぱり思っていた以上にエヴァいじりは楽しいな

って、あれ？何だか目がうるうるしてるような…



「御主人ヲドーニカシヤガレ」

「ん？御主人…エヴァンジェリン…はっ！？」

そーだそーだエヴァ泣かせたんだった！

どうしようどうしようどうしようどうしよう「イイ加減ニシロヨ…」  
はい、すみませんでした！！

「まあ、それは置いていて」

「何ヲダヨ」

「まあ、それは置いていて」

「ダカラ何ヲダヨ！？」

どうしようか…頭でも撫でてみる？もしくはギュッと抱きしめてみる？…よしっ！両方やろっ！…

「うう…チャチャゼロにまで…無視…された…グスッ」

「エヴァンジェリン…」

「ぶえ？」

ナデナデ

「ごめんな…無視なんかして」

「ん…やだ、もっと撫でてくれないと許さない」

あれ？なんか幼児退行してねーか？てかヤベーんだが……もの凄くかわいい！！

「エヴァンジェリンそろそろいいか？」

「まだだめ、もっと撫でて」

どーすりゃいいのさ…前世では女の子撫でる経験なんてなかったから対処の仕方がわからんぞ…

「いつまで撫でたらいいんだ？」

「……………」

「おーい？どーしたエヴァンジェリン？」

「…スウー……………スウー……………」



寝てるよこの子……まだ出会って1日も経ってないのに……こんなに  
無防備でいいのか？

## 第7話（後書き）

感想、誤字脱字などがあればご指摘お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7499x/>

---

暇人の暇つぶし

2011年12月28日05時46分発行